

テーマ 高齢化が進む日本農業に対し、 私たちができることについて

クラブ員代表者会議 北海道ブロック 東北北海道連盟 北海道中標津農業高等学校

生産技術科 3年 山中 龍 哉
食品ビジネス科 3年 笠井 里 紗
生産技術科 2年 志賀 裕 翔
食品ビジネス科 2年 佐々木 鈴 華

【概要説明 北海道農業及び北海道中標津農業高等学校（農業クラブ）について】

私たちの住む北海道は、三方を太平洋、日本海、オホーツク海に囲まれ、農産物や海産物、林産物といった天然資源が豊富であることから、日本の食糧基地として大きな役割を担っています。そして今年、探検家・松浦武四郎によって「北海道」と命名されてから 150 周年となり、大きな節目を迎えています。



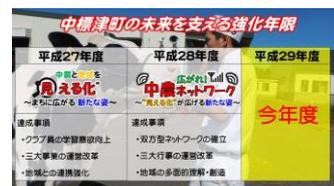
そんな北海道は、1 農業経営体あたりの農地面積は他府県の約 15 倍と、大規模で専門的な農業経営が特徴です。



このように北海道農業は、広大な大地で行われているために、気象条件や土壌性質など地域によって大きく異なります。そのため、それぞれの地域に合った農業技術の習得が必要とされることから、日本学校農業クラブ北海道連盟では、大きく 3 つの地域連盟に分かれ、合計 29 校が加盟しています。



私たちの学び舎、北海道中標津農業高等学校は、札幌市から約 400 キロ、ここ鹿児島県からは 2,673km をも離れている、日本最東端の単置型農業高校です。学科編成は、農畜産物の飼育・花き栽培などを中心に学ぶ生産技術科と、食品加工や流通を学ぶ食品ビジネス科の 2 間口、全校生徒 70 名の小さな町立学校です。



そして、中農農クはまちの未来を支える強化年限を定めています。年度始の校内リーダー研修会では、指導主幹の須郷一美先生を講師に迎えて活動の分析を進めていくと、私たちの活動は断片的になっていることを課題として確認。そのため、この課題を解決する一つのキーワードに着目しました。それは「学力の三要素」



この三つの要素が示す各項目を中農農クバージョンにカスタマイズさせ、それぞれを親しみやすく「好きになる」「やる気になる」「自信になる」の 3 つとし、これらを一体化させていくことを活動目標にしました。



よって、活動テーマを「中農農クは“なるみつつ”～時代を創る新たな方程式～」としました。それでは私たちの実践内容を報告します。

【北海道中標津農業高等学校・農業クラブ実践報告】

実践1 中農初！ゲストティーチャー制度の導入！未来を拓く農ク のカタチ

5年ごとに調査が行われる農林業センサスによると、北海道内の農業人口は約9万人であるものの、65歳以上の割合はおよそ40%にも上ってしまい、道内全14管内で見ると農業人口が減少傾向になっています。しかしながら、本校が位置する北海道根室管内では、農業者の平均年齢は道内でもっとも若い平均51.5歳であることから、今以上に人材の循環を加速していくことが必要だと考えています。

そこで、中農・農クでは地域と密接に関わっていくなかで「学び、考え、伝えていく」農業クラブ活動が大切だと考え、地域の方々がゲストティーチャーとする事業改革を実践しました。

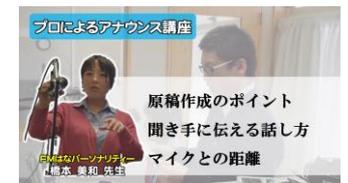
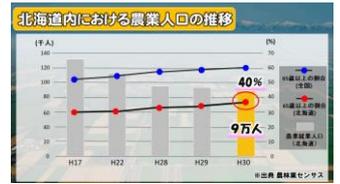
意見発表大会は、まず新入生に対して大会内容を分かりやすくまとめた通信を作成し事前に大会内容をレクチャー。また、ゲストティーチャーにラジオDJ橋本美和さんによるアナウンス講座を開講したほか、惜しくも選ばれなかったクラブ員に対して敗者復活制度も導入したことにより全員、入賞することができました。クラブ員に「意欲的に取り組みましたか」の問いには87%へと向上し、意識が高まってきていることが分かります。

技術競技大会は、「鑑定ファイトクラブ」をパワーアップさせた専門性向上プロジェクトG-NAPを新たにスタート。見通しを持って学習してもらうために、4月に鑑定問題集「鑑定バイブル」を刊行しカレンダーも差し込みながら、学習を振り返る時間を設定しました。また、日課表を変更して朝学習の時間を拡大し、競技会ごとにゲストティーチャーを迎えた学習会を開催。地域の方々が講師に迎え、地域の実態に応じた専門性の高い学習内容を実現しました。

その他にも、農業学習の成果を活用する風味審査と食品判定競技を特別導入し、学びながら活用できる機会を実践。過去3年間の平均点の推移は上昇し、数多くのクラブ員が全国大会へ出場しています。

プロジェクト発表会は、全研究班が全道大会へ出場するなど意識が高い行事です。

そこで、道内初の試みとして全農と日本コカコーラ株式会社、そして近隣酪農家をゲストティーチャーに迎えた「中農シンポジウム」を開催。講演には日本コカコーラ副社長の後藤由美さんから日本の農業についてビデオメッセージが寄せられ、それぞれの立場から農業情勢や地域が抱える農業問題を学習。また、講演後には全7つの研究班長と講師陣が出席した「中農G7」を開催し直面している課題や疑問点を共有、活発な意見交換が行われました。クラブ員に「三大行事の学習内容はレベルアップしましたか」の問いには昨年度より17%高い97%が農業学習を進化できたと実感。



私たちは、ゲストティーチャー制度を導入したことにより、地域の方々から知識や技術を伝承し、分かることが楽しいと感じたことで、農クを好きになってもらうことができました。

実践2 見える化で完成した私たちのネットワーク！

地域と創る新たな時代

まず、執行部は全校で地域連携を推進させていくために、リーダー研修会特別版として農水省・情報分析室長の小山内司先生をお招きし、効率の良い会議の進め方や聴衆者への正しい伝え方などを学びました。

そして入会式では「農クって何？」を理解してもらうため、交流形式で「YOUは何しに中農へ？」を企画し、農クの魅力を発信。年度始総会では、農ク会長から今年度のスローガンが提案され、「中標津町の未来を紡ぐ」を合言葉に、全員で意志を統一しました。

生産技術科では、共進会への出場や地域の臭気対策について、近隣農家と共同でプロジェクト活動を展開するとともに、札幌市で開催されたガーデングコンテストに出場。まちの牧歌的な地域景観を表現したことで、一般投票第1位を獲得。道東地域初の4年連続入賞を達成しました。

食品ビジネス科では、牛乳類を使ったレシピコンテストに参加し地域食材をふんだんに使った「大地のプリン」がセコマ賞を受賞。道内コンビニエンスストアで商品化がされると、学校がある計根別地域では1カ月に500個を完売しました。

卒業生1,000人を越える計根別食育学校は開校12周年を迎え、小中一貫校「計根別学園」との連携も強化。各研究班が横断的に、まちの未来を見据えた食農教育の展開を続け、町の食育推進委員の就任や農水省・食育白書への掲載が決まるなど、新たな世代への伝承が確実に進んでいます。

これらの取り組みを通して、前年度より17%高い97%のクラブ員が自ら積極的に行動できたと実感。地域とともに課題を解決させていく姿勢は郷土を担う自信に繋がり、更なる地方創生へと繋がるでしょう。

実践3 開かれた農クの先駆者は私たち！地域に広がる心のライン

毎月放送中のラジオ番組「Hello!中農Radio」は3周年を迎え、番組スポンサーは計4団体となり、多くの提供を受け絶賛放送中です。

この番組は、クラブ員が取り組んだ成果を広く発信していくことを目的に「今、農業高校では何を行っているのか」を多くの方に理解してもらいたいと考え、放送を開始しました。今年度の新たな取り組みとして、各研究班の新製品を番組内で発表し、販売会で実施した試食の感想を募集すると多くの声が寄せられ、農クと町民を繋ぐコミュニ



ケーションツールであることを確認。また、海外衛星中継もパワーアップし、ニュージーランドとハワイ、そして日本を結ぶ三カ国中継を実現するなど町民の関心を引き出すための工夫を実践しました。すると、放送後にリスナーさんからは「懐かしい！」「こんな活動をしているんだ！」と多くの声が寄せられました。

クラブ員に「中農ラジオは成果発信の場に最適ですか」では昨年度と比べて11%UPの88%が「活動発信に適している」と回答、また「中農農クは開かれた活動をしていますか」では93%が「自分たちの成果が発信されている」と答え、クラブ員一人一人に自覚が芽生えました。その他にも、道内ラジオキー局の電波ジャックを達成するとともに、総務省と連携を図り動画サイト YouTube に中農オリジナル番組を製作することに成功。私たちの活動が道内、そして世界へ広がりました。

私たちは、開かれた農クを実践したことでクラブ員の自覚が生まれ、確たるやる気を引き出すことができました。

以上の活動から今年度の成果をまとめると

1. 地域の方を講師に招いたゲストティーチャー制度によって専門性の高い内容となり、農クを好きになることができた
2. ラジオの発信力が拡大しコミュニケーションツールとなったことで、クラブ員の自覚芽生え、やる気を引き出すことができた
3. 地域と繋がる活動を進化させ、一人一人の自信に繋がられたの三点が挙げられます。

次年度は、クラブ員の飛躍を目指し次の三点に取り組んでいきます。

最後に中標津町長・西村穰さんからは「なるみつつの精神によって多くの生徒が輝いていました。町の新時代を築いていくのは中農です」といただき、クラブ員は98%がなるみつつを達成できたと回答、農クとまちの共存共栄を確認しました。

【まとめ】

まちの産業を担い、地域とともに歩んでいく農業高校。そして、農業学習を深化させていく農業クラブ活動の可能性は無限大です。

高齢化が進む日本農業に対して、農業クラブができること。それは“各単位クラブの活性化”であり、農ク活動で築かれた地域とのコミュニティによって農業者から知識や技術を受け継ぎ、新たなアイデアとして次の時代を創造するものと考えます。

そのすべての活動は「まちの産業は私たちが守る」そして「まちの未来を築くのは私たち」という強い思いが、中農に結集し、心の矢印を明日に向けて、輝いていきます。

「好きになる×やる気になる＝自信になる」3つの「なる」が完成した瞬間、私たち中農クラブ員の魅力は全開です。



- 今年度の成果
- ① クラブ員の自覚が芽生え、やる気を引き出した
 - ② ゲストティーチャー制度によって、農クを好きになった
 - ③ 地域との繋がりを進化させ、クラブ員の自信に繋がった

- 次年度の課題
- ① 単位クラブ間の連携・交流を図る
 - ② 3年間を見通した農業クラブ活動の実践
 - ③ 科学的活動評価法の確立

